

Japan Evangelical Theological Society

日本福音主義神学会

J·E·T·S·NEWS Vol.22

発行所/270-1347 千葉県印西市内野3丁目301-5-1 東京基督神学校内



日本福音主義神学会 J·E·T·S 巻頭言 ミレニアム 新千年紀の門に立って

理事長 佐布正義

死人がよみがえることは、モーセも柴の籟で、主を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と呼んで、これを示した。神は死んだ者の神ではなく、生きてゐる者の神である。人はみな神に生きる者だからである。

(ルカ二〇・37、38)

共観福音書の記者たちは、筆をそろえて、主イエスとサドカイ人との「復活」に関する対話を記録している。同一の事柄を扱っているが、視点を異にする相違が明らかである。そこに、私たち神学的、宗教的、教育的活動にたずさわる者に対する様々な示唆が含まれているのを見る。

○聖書を知り、神の力を知る

サドカイ人の疑義がどんなに論理的に構築されていても、その原点は、主の鋭い指摘のように、「聖書も神の力も知らないから……」という事実である。「神があなただけに言われた言葉を讀んだことがないのか」という叱責が続く。「論語読みの論語知らず」でない

よう厳しい自省を求められる。特に、今日に於いて「神の力を知る」ことの意義は重要である。

この点は、マタイ、マルコの記録に依るものであるが、主イエスによる旧約聖書の啓示の新しい理解についても留意したい。トローラーの「柴の籟」に於て神は、モーセ

に対して御自身のアイデンティティーのために、「あなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と言って超時性(現在性)を示されたのである。しかし、主イエスの引用に於いては、神の永遠性を前提としつつ、視点を有限な人間に移して、「復活」により神と共に永遠に存在する人間に復帰することを教えておられるのである。神の啓示の有機的理解を求められている。

○聖書を知り、人間とその世界を知る

第三の福音記者ルカは、新しい視座から主イエスの啓示を受けとめ、聖霊に導かれて結語として的一句を付加している。「復活にあらずかるにふさわしい者たち……」

から更に進んで、「人はみな神に生きる者だからである」と復活の事実を普遍化する。「神は死んだ神ではなく、生きてゐる者の神である」ことから、神のかたちに造られた人間は、神と共に、神に在って (αὐτῶν ὁμοίον) 生きることが定められている。後に使徒パウロはこの啓示をより鮮明にし、「……罪過によって死んでいたわたしたちを、キリストと共に生かし、……共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さったのである」(エペソ二・5、6)と宣言している。同じくパウロはアレオパゴスにて、「われらは神のうち

に生き、動き、存在している……」という真理を、異邦人にも同感し、神を受容することを迫っている。神から離れた人間は、神の恵みによって「世・世界 (κόσμος)」を構成し、この地を住居としている。本来、人はこの地を治め、この世をさばく立場にある(1コリント六・2)。コスモス的な回復を視野に捉えて、活動奉仕にたずさわるものでありたい。

○教会に在って、教会と世に仕える肢体としての神学会は……

「この世ときたるべき世」の上

に在るキリストの肢体として、神の経綸に参与することを願ひ、新ミレニアム(千年紀)に備えたい。」